

---

# IS(インフィニットストラトス) ~ 獣戦機に乗る者 ~

紅の牙

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

インフィニットストラトス  
IS 獣戦機に乗る者

### 【コード】

N9984X

### 【作者名】

紅の牙

### 【あらすじ】

神のミスで死んでしまった主人公が、ISの世界に転生。神に頼んで作ってもらった機体でISの世界を生きる

## プロローグ

「……………」

目が覚めると、俺は不思議な空間に浮かんでいた

「……………此処はどこだー!?!」

周りに誰も居ないので、俺は思いっきり叫んだ

「どうなってんだ？俺は女の子を助けて死んだはず、それなのに  
なんでこんな所に浮いてるんだ？わけわかんねー!?!」

「つたく、目が覚めたばかりだったのにうるせえやつだな」

俺の前に白い服を着た青年が現れた

「……………あんた誰？」

「俺？俺は神だ」

「つで、その神様が俺に何のようなんだよ」

俺が聞くと

「お前に謝りに着たんだよ」

「は？」

「お前はあの時、死ぬはずじゃなかったんだよ。だけど、俺のミスでお前は死んだ。だから誤りにきたんだ。・・・すまなかった」

神が俺に頭を下げた

「・・・頭を上げてくれ。過ぎちまった事はもう戻せないからな」

「お詫びといつちや何だが、お前をインフィニットストラトスの世界に転生させることにした」

「何でISなんだ？」

「俺が最近ISにはまってるから」

「それが理由かよ」

俺は突っ込みを入れた

「細かい事は気にするな。それと、五つまでお前の願いをかなえてやる、何が欲しい？」

「・・・じゃあ、身体能力MAXと覇気、身体能力の基準はスパロボ。俺の専用機。機体はダンクーガノヴァでコアと動力にはGNドライブとアブソリュートアクティブフォースジェネレーターを複合したもの。データ表示ではアブソリュートジェネレーターのほ

うで。機体を作る知識（SRWの）、コア、資材。後は秘密基地、出来れば場所は龍牙島で基地はドラゴンスハイブ」

「その程度ならお安い御用だ。ふん！！」

神が変な声を上げると、俺の前に五つのコアと俺の専用機『ダンクーガノヴァ』が現れた（勿論待機状態で）

「じゃあ、頑張れよ。それと、時間帯は原作開始の5年前ぐらいだからな」

そういうと、俺のいた場所に穴が開き、俺は落ちていった

「こんなオチでいいのかよー！？」

## 設定

### 設定

名前 飛鷹葵（ひだかあおい）

年齢：11歳（原作前） 原作開始時は16歳

容姿：フォルカ・アルバーク 髪の色は黒

詳細：転生前は大のロボット好きでスパロボなどをやっており、OG3で機神拳を見た時、体に電気が走り劣化版機神拳を習得した。転生するときの特典で覇気を貰い完全な機神拳を習得した、その実力は素手でISを倒せるほど

5

### 専用機

機体名：ダンクーガノヴァ

世代：第4世代～第5世代

待機状態は蒼と銀のブレスレット

神に頼んで作ってもらった、葵の専用機。全身装甲で機体を使用している時は、頭のパーツに赤いバイザーを装備している。動力に

はアブソリュートアクティブフォースジェネレーター+GNドライブを混ぜ合わせたものを使っているので、エネルギーとシールドエネルギーはほぼ無限。だから試合ではシールドエネルギーのみリミッターをつけている。さらに脊髄反射システムを装備しているので葵の動きを正確に再現できる

## 武装

断空剣：左足に格納している剣。GNドライブの力を纏わせることにより、白式の零落白夜以上の力を出す

断空砲：背中にある大砲、両腰にある砲、そして、両手に砲を展開し、撃ちだす。威力は一撃でアリーナのシールドを破るほど（普段はリミッターをつけている）

ミサイルデトネイター：腰に装備している砲から大量のミサイルを発射する

ブーストノヴァナックル：腕の手甲を打ち出して攻撃する、普段はあまり使わない

鉄拳：拳にエネルギーを纏わせて攻撃する。ちなみに機神拳も使える

## 単一仕様：ゴットビーストモード

顔に鷹の顔を模したバイザーが装備され全身が金色になり、胸の鼻が伸び腕にクローが装備される（アニメみたいにな感じ）。この状態では武器は使えないが、その代わり、攻撃力、防御力、機動が通常の10倍に跳ね上がる。

## 第1話 原作が始まるまでその一

葵 side

葵：「うん？」

目が覚めると、俺はベッドの上で眠っていた。起き上がり、外の景色を見るとそこは大自然だった

葵：「こいつは凄いな」

俺が驚いていると

『起きたのかい？』

電子音が聞こえてきた

葵：「誰だ？」

『驚かせてすまない。私はこのドラゴンスハイブのシステムを管理しているAIだ』

空中にディスプレイが展開された

葵：「そうか、もしかして神様がつけてくれたのか？」



『ああ。彼は私に君のサポートをしてくれと言っていた』

葵：「そいつはありがたい。所で名前は何て言うんだ？」

俺が聞くと

『私に名前はない』

葵：「だったら俺がつけてやるよ。・・・そうだな、お前の名前はWILLだ」

ぶっちゃけ、ノヴァのをぱくっただけだけどな

WILL：『素晴らしい名前をありがとう。では、施設について説明する』

俺はWILLの説明を聞き、取り合えず、ISを起動させようとトレーニングルームに向かった

↳トレーニングルーム↳

葵：「へえ、結構広いな」

俺が関心していると

WILL：『此処はISに乗って訓練する場所だ。普通の訓練ル

ームもあるから安心してくれ。』

葵：「IS専用のルームか。まあ、これぐらい広くないと、訓練できないからな」

広さはIS学園のアリーナ並み by 作者

葵：「さて、やりますか。超獣合神!!」

そう叫ぶと、俺のISダンクーガノヴァが装着された

葵：「さて、まずは走行からはじめるか」

俺はアリーナを歩き出した

葵：「ふむ、脊髓反射システムのおかげで動かし安いな、これなら慣れるのに時間はかからないな」

その後、アリーナを一周した俺は

葵：「次はイグニッションブーストでもやってみるか」

俺は脚の走行に力を入れ、思いっきり蹴るとアリーナの壁に激突してしまった

葵：「……………此処まで制御が難しいなんて。今度は成功させてやる」

再びイグニッションブーストに挑戦、今度は成功した

葵：「つーか、俺のイグニッションブーストってかなり早くないか？」

俺はイグニッションブーストを使用している映像を見ていった

葵：「これって、ネギまつで言う瞬動レベルだと思うんだが、GNドライブを使ってるって思えば納得だな」

俺は無理やり納得した

葵：「次は武装の確認だな。って武器はほとんど同じだから確認しなくても問題ないけど、威力は確認しておくか。WILL、ターゲットを出してくれ」

WILL：「解った」

WILLに頼みターゲットを出してもらった

葵：「まずは、これからだな断空剣!!」

叫ぶと、左足の装甲の一部が開き、剣を射出した、俺はそれを取り、刀身を展開した

葵：「はあああああっ!!」

ブースターを使い俺はターゲットに接近し

葵：「断・空・斬!!」

ターゲットを一刀両断にした

葵：「凄い斬れ味だな。これならレアメタルでもすぱつと切れそ  
うだ。・・・良し次は、こいつだ！断空砲、アルティメットフォ  
ウメーション！！」

俺は全砲を展開し構えた（構えはアニメ通り）

葵：「ターゲットロック！マキシマムレベル、シュート！！」

ターゲットをロックし、フルパワーで発射した

葵：「・・・・・・・・」

砲撃はターゲットを一瞬で壊し、さらにアリーナの壁も破壊した

葵：「・・・・・・・・これはリミッターをかけたほうがいいな」

その後、機体を一通り動かし、その日の訓練を終えた

## 第2話 原作が始まるまで、その二

葵 side

俺が転生して早3年、俺は14になった。ISでの戦闘はこの3年で急激に上がり、WILL曰く、『国家代表2人を1人で倒せる』らしい。・・・そんなに強くなったのか、俺？

葵：「ここをこうして。ここはこうで・・・」

現在、俺は整備質で新型のISの作成をしている

葵：「・・・出来た」

最後のプログラミングが終了し、俺は背伸びをした

葵：「ダイナミックゼネラルガーディアン3号機『雷凰』完成だ。」

俺は台に座っている雷凰に近づいた

葵：「早速、起動させるか」

雷凰を起動させようとしたら

WILL：『葵、島に侵入者が来た。数は2人だ』

WILLが侵入者が入った事を知らせてくれた

葵：「侵入者？この島に？・・・WILL、映像を出せるか？」

WILL：『無論だ』

WILLはモニターを展開してくれた

葵：「おい、おい」

そこに映っていたのは、ISの生みの親『篠ノ乃束』と17代目暗部頭首『更識楯無』だった

葵：「・・・WILL、この島にはジャミングが張ってあるんだよな？」

WILL：『ああ』

葵：「じゃあ、何ではれたんだ？」

WILL：『恐らく、このあたりの海域のデータを見て、ジャミングに気づいたんと推測する』

葵：「はあく。後でジャミングの強化をしないとな」

WILL：『それで、この2人はどうするんだ？』

葵：「まあ、大事なお客様だからな、丁重におもてなししろ」

WILL：『了解』

そういうと、画面で映っている二人の足元に穴が開き、2人はその穴に落ちた

WILL：『司令室に移動させて追いたぞ』

葵：「ご苦労さん、そんじゃあ、話し合いと行きますか」

俺は整備質を出て司令室に向かった

葵 side end

3人称 side

楯無：「え」と、此処はどこなのかしら？」

意識が戻った楯無は、自分の状況を確認している

楯無：「（見る限り、此処は司令室のようね。・・・IS学園より大きいと感じるのは気のせいかしら？）」

楯無が周りを見ていると

束：「~~~~~」

鼻歌を歌っている、篠ノ乃束がいた

楯無：「あ、あなたは篠ノ乃博士！？何で貴方が此処に！？」

束：「うん？なんだい君は、私の知り合いに君みたいなのはいいよ。それと、邪魔しないでくれるかな？私は今、自分の知らない技術を見れて感激してるんだから」

束は冷たい目で楯無を見た

楯無：「……噂どおり、自分の知人以外には冷たいのね。取り合えず、ISを起動して脱出するのが最優先ね。それと博士も助けて恩を売っておかないと」

心でそう決め、ISを起動させようとしたが

束：「今、気分がいいから伝えておくよ。ここではISは起動できないよ。特殊な電磁はのせいかな、それともこの縄のせいかなは知らないけどね」

楯無：「そ、そんな」

葵：「何だ、もう起きたのか。予想より早いな」

葵が司令室に入ってきた

束：「……君は誰かな？」



葵：「こいつは失礼、俺の名は飛鷹葵。篠ノ乃博士、そして暗部頭首、更識楯無さん、ドラゴンズパイプにようこそ」

葵はお辞儀をした

楯無：「（私の正体に気づいている！？）」

楯無は自分が暗部頭首だと言われ、驚いた

東：「ドラゴンズハイブ。それがこの島の名前かな？」

東が葵に質問した

葵：「いや、この島の名は龍牙島。ドラゴンズハイブはこの基地の名前だ」

葵は椅子に座った

葵：「さて、いくつか質問していいか？それと危害を加えるつもりは無いから安心してくれ」

楯無：「・・・それで、質問は？」

葵：「何、簡単な質問だ、何故この島の場所がわかったのか。そして、何の目的でこの島に着たのか」

葵が言うと

東：「私はこの島からコアの反応が6つ確認できたからだよ。この島に来たのは単なる気まぐれ？」

楯無：「私がこの島の事を知ったのはこの島から強力なジャミングが出ていたから。この島に来たのはただの調査よ」

葵：「成る程ね」

葵は納得してうなずいた

東：「今度はこっちから質問していいかな。君はここに住んでいるのかな？」

葵：「ああ。この島には俺と、この施設のWILLしか居ない」

楯無：「WILL？」

葵：「この施設を管理しているAIだ」

WILL：『始めまして』

モニターが開きWILLが二人に挨拶をした

東：「それと、もう一つ質問いいかな？何で君は此処に住んでいるのかな？」

葵：「そうだな、政府から隠れるためかな？」

東：「何の為に？」

葵：「自分の身を守るために。ISを動かせる男ってのは珍しいからな」

楯無：「男の人がISを動かせる嘘ね」

葵：「嘘じゃないんだな〜これが」

翔は椅子から立ち上がり、ダンクーガノヴァを起動させた

楯無：「っ!?!」

楯無は男がISを動かせた事に驚いていた

束：「…………それが君のISかい？」

葵：「そう、俺の専用機『ダンクーガノヴァ』だ」

束：「すごいね、束さんでも全身装甲のISはまだ開発できていないのに」

束は感心していた

葵：「っふ」

葵はISを解除し、2人の縄を解いた

楯無：「何のつもり？」

葵：「別にいつまでも女性を縄で縛っておく趣味はないからな」

楯無：「……………」

楯無はISを起動させようとしたが

葵：「止めておけ」

いつの間にか葵が楯無の後ろに回りこんであり、腕を掴んでいた

楯無：「（私が反応できなかった!?!）」

葵：「俺とお前とじゃ、力の差が違いすぎる。それと、博士。勝手にコンピュータを弄るのは止めてもらえませんか？」

東：「うん、ま、あっくんの頼みだし聞こうかな」

葵：「あ、あっくん!?!」

東：「うん、東さん君の事気にいちゃった。今日からここに住むよー」

葵：「はあっ!?!」

葵はわけが解らなかった

東：「取り合えず、整備室にレッゴー!?!」

東は司令室をでて、整備室に向かった

葵：「ちょ、ちょっと!?!」

葵はあまりの速さに驚いていた

楯無：「え〜と、取り合えず離してもらえないかしら？」

葵：「おお、ごめん、ごめん」

葵は楯無の腕を離れた

葵：「それで、お前はどつするんだ？このまま、帰るか？まあ、その時は俺の記憶を消させてもらけどな」

楯無：「さらっと、とんでもない事を言っわね」

葵：「モルモットになるつもりは無い」

楯無：「記憶は消さないでもらえるかしら。っあ、安心して貴方のことは誰にも言っつもりはない」

葵：「まあ、いいだろう。」

葵は司令室をでて、整備室に向かった。楯無は慌てて葵の後を追った

↳整備室↳

東：「何これ、凄い！搭乗者の動きを完全に再現できるシステム・・・こっちは新しいISの設計図・・・此処は東さんにとって宝の山だー！！」

葵と楯無が整備室に入ると、テンションが最高潮の東がいた

葵：「テンション高いな、博士は」

東：「うん？あつくん、来たんだ。そうだった！あつくんのISのデータを見せて」

葵：「っえ？は、はい」

葵はキーを叩きノヴァのスペックを表示した

東：「ほう、ほう。って、何これ！？動力のおかげでシールドエネルギーと普通のエネルギーがほぼ無限！？こっちのシステムはさっき見たから驚かないけど、ワンオフアビリティを発動するとスペックが10倍に跳ね上がる！？何このチート機！？」

東は驚いていた

東：「あつくん、このIS誰が作ったの？」

葵：「一応俺ですが」

東：「凄い、凄い。あつくん、私と結婚しよ」

葵：「結婚！？博士、俺はまだ14ですよ」

東：「博士って、そんな他人行儀な言いかたしないでいいよ。もっとフレンドリーに」

葵：「じゃ、じゃあ東さんで」

楯無：「なんか、私の影が薄くなってきてる様な」

東：「うん？まだ居たのかい君は、とっと帰りなよ。東さんは今からあつくんと熱い夜を凄いですんだから」

葵：「東さん、さっき言いましたよね、俺まだ14。それはまだ早いです。それと、あまり他人を邪険しないほうがいいですよ」

楯無：「葵君ノノノ（か、かつこいい）」

葵はまたフラグを立てた

東：「むう、あつくんがそう言うなら、その子のことは認めてあげる。でも、正妻は私だよ！！」

葵：「何の話ですか？つーか日本は一夫多妻の制度じゃないんですけど!?!」

葵は東の発言に突っ込みを入れた

楯無：「そうだった!!博士、ちょっとこっちに」

東：「何かな」

楯無：「実はですね。ゴニョ、ゴニョ」

東：「それはいい考えだ！よし君もあつくんの正妻に認めよう。ついでに、君のISも見てあげるよ」

楯無：「ありがとうございます」

葵：「一体何なんだ？」

葵はこの状況についていけなかった



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9984x/>

---

IS(インフィニットストラトス) ~ 獣戦機に乗る者 ~

2011年10月29日03時04分発行